

(1)

問一	⑦ 契機
	① 渴(き)
	⑦ 魅了
	⑤ 苦惱
	④ 即座
問二	自分は他の人間とは違った別の存在であり、自分を実際以上によく見せたい、価値ある特別な存在として認められたいと、他者に対して望む感情。
問三	自分がいったい何を欲しているのか分からず、目の前の世界がただ「そこにあるだけ」のものとして散逸して存在し、自分の生きる世界に対して、積極的に意味を見出せない状態。
問四	人間は、世界に対して欲望を持ち、働きかけ続けることで、世界を意味あるものとして捉えることができるようになり、「欲望の中心点」を持ちつつ、その欲望を叶えることで、自分の生きる世界に豊かさや自由を感じることができるようになるから。

(2)

問一	② はんも
	① きつこう
	⑦ ふしよう ぶしよう
	⑤ げんしゆく
	④ あがな(い)
問二	茂っている草木を描くのに、緑ではなく濁った重苦しい黄色を用いたり、前景の土が与える感触までもが伝わってきたりするほど、画家の感性が優れているから。
問三	画家やその絵画に関する情報を通してしか絵画を見ることができず、一面的価値観で評価を下すことに何の疑念も持ち合わせない傲岸不遜な人間。
問四	絵の作者の生き様や展示の経緯などを知り、その画家が精神を蝕まれ生命を犠牲にしてまでも自分の思うような絵を描き上げたのだということが改めて感じられたから。
問五	最初は、展示会場の暗い片隅に、忘れられたように懸かっている、貧弱な額縁の絵だという印象を受けたが、画家自身の感性がそのまま表現されていることから、大いに感動した。しかしその後、既に故人となった画家の生き様を知り、絵に描かれた草木が、彼自身の画家としてのひたむきな思いや壮絶な生き方を象徴している「傑作」ではないかと解釈するに至った。

(3)

問五	問四	問三	問二		問一		
			ぬ	知ら	e 光源氏	c 僧都	a 大人
まだ幼い少女をこの世に残して、尼君が先に亡くなるうとするのはあつてはならないことだと弱気な尼君を慰めつつ、励まそうとしていると推察される。			打消の助動詞「ず」の連体形		ラ行四段活用動詞「知る」の未然形		
世間で評判の光源氏の美しさを見ると、まったく世の悩みも忘れ、寿命が延びるほどの立派なお姿です					d 僧都(法師)		
「こぼれかかりたる髪つやつやとめでたう見ゆ」から、黒髪が豊かで長くつややかで、将来が楽しみな美しい女性に成長すると想像される。					b 光源氏		

(4)

問一	問二	問三	問四	問五
現代は、腕の良くない医師は患者を殺しもせず健康にもせず、その患者を死にもせず健康でもない狭間の状態にいさせて、その病気が日々悪化し、結局死に至ってしまうようにさせている。	(始) 大抵雑泛而	豈に古の上医の失する無き能はざるを知らんや。	『周礼』に、十人中四人の治療にしくじった医師でも低級な医師として俸禄を与えていたという記載があることを根拠にして、昔の人は、十人中三、四人の治療にしくじっても、その医師を用いていたということを行っている。	思うに、たとえその患者が死んだとしても、どうして昔の医師が治療にしくじるのを当然としてきたことだけで、医師に責任がないといえるだろうか、いや、それは医師の責任である。
	(終) 又治之不勇			